

## 時鳥ほととぎすと口兄弟

昔々、兄弟二人が山に住んでいたんだと。そして兄んやの方は我儘勝手の気性だったと言うんだない。兄は外へ行って、いろいろ仕事はしてくっけど、家の中の事はおかまいなし。家の中のそうじとまかないはすべて弟の役割だったんだと。ある時の夕食、弟は兄んにやの為に、特別にうまい御馳走をこしらえて「兄んにや、兄んにや早くおあがりおいしく出来たから」と兄さんにたべさせたんだと。兄さんは、おうこれはうまいと、全部食べてしまい

「いま少しないのか、お前は俺のいないあいだに、何んぼか腹いっぱい食べたんべ。」と言ったんだと。弟は「いや、そんな事はない、私は兄さんにたべてもらおうと思って、少ししか食べて居ない。」と言ったんだと。兄は「いやそんな事はない、きつとお前は腹いっぱい喰ったに違いない。

そんなに言い訳をするなら、お前の腹を裂いて見よう」と言う事で弟の腹を裂いて見たんだと。そしたらほんとに

何もたべてなかったんだと。弟は兄さん思っていたので、兄さんにびっくりおいしいものをたべさせて居たんだと。兄さんは、弟のお腹を切っては見たものの「あ、これは悪かった」と思ったんだべない。この時、鳥になって飛びただし「ぼつとぶつさけたぼつとぶつさけた」と飛んで行ったんだって。その時弟は、もう死んでしまったし、兄の方は、時鳥ほととぎすになって、自分が悪い事をした、これまでに弟が自分に尽してくれたのに、弟を疑ってこういう事をしてしまった、自分でほんとうにすまないと思ってる鳥になったんだと。そしてその罪ほろぼしに、一日八千八声鳴かなくてなんねんだと。

